

<マニュアル訂正連絡票>

ASP システムコマンド集 V28

[J2K0-5780-01]

2021年6月29日発行

修正箇所(章節項): 「本書の使い方」の「G. 共通変数」

旧記事

@MAXRMSG	ワークステーションメッセージキューのメッセージ蓄積最大数を指定する。 当共通変数を変更した場合は、@SYSRMSG の変更も必要である。	整数型	32~4096 初期値: 1024	不可	次の IPL より有効となる。
----------	---	-----	----------------------	----	-----------------

新記事

@MAXRMSG	ワークステーションメッセージキューのメッセージ蓄積最大数を指定する。 当共通変数を変更した場合は、@SYSRMSG の変更も必要である。	整数型	32~4096 初期値: 1024	可	次の IPL より有効となる。
----------	---	-----	----------------------	---	-----------------

2017年4月26日発行

修正箇所(章節項): CHGATJSE (自動ジョブサービス環境の変更: Change Auto Job Service Environment)

旧記事

~ (中略) ~

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

- 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

~ (以下、略) ~

新記事

~ (中略) ~

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

- 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。
- 自動ジョブサービスを使用する場合、システム共通変数@TMSCODE に@SJIS を設定する必要がある。

～（以下、略）～

修正箇所（章節項）： DSPATJSE （自動ジョブサービス環境の表示：Display Auto Job Service Environment）

旧記事

～（中略）～

実行条件

- 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

～（以下、略）～

新記事

～（中略）～

実行条件

- 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。
- 自動ジョブサービスを使用する場合、システム共通変数@TMSCODE に@SJIS を設定する必要がある。

～（以下、略）～

修正箇所（章節項）： STRATJS （自動ジョブサービスの起動：Start Auto Job Service）

旧記事

～（中略）～

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

- 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。

～（以下、略）～

新記事

～（中略）～

実行条件

キーワード	対象	権限	条件
なし	/opt/atjs	@R @X	—
なし	/opt/atjs/XATJSENV	@R @W	—
なし	/opt/atjs/XATJSFF	@R @W	—

- 本コマンドを使用するプロフィールは、@SYSCTL 権が必要である。
- 自動ジョブサービスを使用する場合、システム共通変数@TMSCODE に@SJIS を設定する必要がある。

～（以下、略）～

2016年12月27日発行

修正箇所（章節項）： SETCDXTD

旧記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。

オペランド

PORT（整数型）：

相手ポート番号を指定する。初期値は 5020 である。

MN（整数型）：

連続受信回数を指定する。0 から 15 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

RTIME（整数型）：

無通信監視時間を指定する。0～5999 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

監視時間は 1 が 10 秒、999 は 9990 秒である。また、デフォルトの 0 は 30 秒である。

例

```
SETCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。ポート番号を 5020、連続受信回数は 0 を設定する。

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

STRCDXT, STPCDXT, RSTCDXTD

新記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。

オペランド

PORT（整数型）：

相手ポート番号を指定する。初期値は 5020 である。

MN（整数型）：

連続受信回数を指定する。0 から 15 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

RTIME（整数型）：

無通信監視時間を指定する。0～5999 までの値が指定可能である。初期値は 0 である。

監視時間は 1 が 10 秒、999 は 9990 秒である。また、デフォルトの 0 は 30 秒である。

注意事項

1) SETCDXTD コマンドで指定したポート番号はシステムで1つである。複数のジョブでポート番号が違うセンタと同時に接続する場合は、別ジョブの SETCDXTD コマンドで指定したポート番号になる可能性があるため、一つのジョブで順番に実行するか、それぞれのジョブを順番に実行する必要がある。

例

```
SETCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を設定する。ポート番号を 5020, 連続受信回数は 0 を設定する。

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

SNDXFILE, RCVXFILE, RSTCDXTD

修正箇所 (章節項): RSTCDXTD

旧記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

相手ポート番号は 5020, 連続受信回数は 0 になる。

例

```
RSTCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

STRCDXT, STPCDXT, SETCDXTD

新記事

機能

TCP/IP インタフェースでのトランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

相手ポート番号は 5020, 連続受信回数は 0 になる。

注意事項

1) SETCDXTD コマンドで指定したポート番号はシステムで1つである。複数のジョブでポート番号が違うセンタと同時に接続する場合は、別ジョブの SETCDXTD コマンドで指定したポート番号になる可能性があるため、一つのジョブで順番に実行するか、それぞれのジョブを順番に実行する必要がある。

例

```
RSTCDXTD
```

トランジェントタイプ CORDEX の送受信環境を取り消す。

参照マニュアル

『CORDEX 説明書』

関連コマンド

[SNDXFILE](#), [RCVXFILE](#), [SETCDXTD](#)

修正箇所 (章節項) : [SNDXFILE](#)

旧記事

関連コマンド

[EDTCDXD](#), [CTLCDX](#)

新記事

関連コマンド

[SETCDXTD](#), [RSTCDXTD](#), [EDTCDXD](#), [CTLCDX](#)

修正箇所 (章節項) : [RCVXFILE](#)

旧記事

関連コマンド

[EDTCDXD](#), [CTLCDX](#)

新記事

関連コマンド

[SETCDXTD](#), [RSTCDXTD](#), [EDTCDXD](#), [CTLCDX](#)

2016年6月28発行

修正箇所 (章節項) : [STRPULG](#)

旧記事

注意事項

1. 本コマンド実行時は、レプリケーションサービスが開始状態でなければならない。
2. 対象のレプリケーショングループは同期方式が差分方式でなければならない。
3. 対象のレプリケーショングループの更新情報取得状態によらず、取得開始処理を実行する。
4. 対象のレプリケーショングループが同期実行中に本コマンドを実行してはならない。
5. 対象のレプリケーショングループに属するファイルをアクセス中に本コマンドを実行してはならない。誤って実行した場合、更新情報が正しく取得されない状態となる。
6. エラー時に詳細エラーがシステムログに出力されることがある。その場合は、システムログを参照しエラー内容を確認する。
7. 本コマンド実行時に対象レプリケーショングループの更新情報ファイルが初期化される。

新記事

注意事項

1. 本コマンド実行時は、レプリケーションサービスが開始状態でなければならない。
2. 対象のレプリケーショングループは同期方式が差分方式でなければならない。
3. 対象のレプリケーショングループの更新情報取得状態によらず、取得開始処理を実行する。
4. 対象のレプリケーショングループが同期実行中に本コマンドを実行してはならない。
5. 対象のレプリケーショングループに属するファイルをアクセス中 ([INPUT-OPEN](#) 除く) に本コマンドを実行してはならない。

誤って実行した場合、更新情報が正しく取得されない状態となる。

6. エラー時に詳細エラーがシステムログに出力されることがある。その場合は、システムログを参照しエラー内容を確認する。
7. 本コマンド実行時に対象レプリケーショングループの更新情報ファイルが初期化される。

2016年4月28日発行

修正箇所(章節項): STRNSS

旧記事

注意事項

- 1) VS サイズは、作成した NSS 記述の定義数によって変更する必要がある。詳細は『[ネットワーク機能解説書](#)』の「コマンドの使用資源」を参照。

新記事

注意事項

- 1) VS サイズは、作成した NSS 記述の定義数によって変更する必要がある。詳細は『[ネットワーク機能解説書](#)』の「コマンドの使用資源」を参照。
- 2) NSS を起動するには TLIBEX 環境が必要である。
TLIBBS 環境を使用されている場合は、TLIBEX 環境へ移行する。TLIBEX 環境への移行に関する詳細は、『[システム移行手引書](#)』の「バージョンアップ移行」を参照されたい。
また、システム共通変数の多階層ルートライブラリの設定を@TLIBEX にする。

2015年10月7日発行

修正箇所(章節項): RSTCMV

旧記事

注意事項

- 1) 復元ボリュームの状態を知るには、保管ボリュームの表示(DSPR ETN)コマンドを使用する。
- 2) CHGCMVAR コマンドで変更できないシステム共通変数、および@SVRINTM の値は変更されない。
- 3) IPL 後に有効となるシステム変数の初期設定は IPL 時に行われるため、RSTCMV コマンド実行後に IPL が必要である。

新記事

注意事項

- 1) 復元ボリュームの状態を知るには、保管ボリュームの表示(DSPRETN)コマンドを使用する。
- 2) CHGCMVAR コマンドで変更できないシステム共通変数、および@SVRINTM の値は変更されない。
- 3) IPL 後に有効となるシステム変数の初期設定は IPL 時に行われるため、RSTCMV コマンド実行後に IPL が必要である。
- 4) @MAXRMSG は、@SYSRMSG の現在値を超える値を復元できない。この場合は RSTCMV コマンドを 2 度実行し、@SYSRMSG の値を先に復元してから@MAXRMSG の値を復元する。